事故のグループ懇談手法

【概要】

ファシリテータを中心に５、６人の参加者が事故等の原因や対策を話し合うものです。これにより、ヒヤリハット経験や事故防止の工夫などのリスク情報が共有でき、安全意識が向上します。基本的な構成は、話題とする事故状況の話し合い、事故原因の話し合い、対策の話し合いです（図１）。

【特徴】

基本的な構成では、１時間半程度を想定していますが、２０分～１時間半程度の間で現場に合わせて構成できます。直接話し合うことによりヒヤリハット収集等では集まりにくい情報が共有できます。現場へのスムーズな導入を支援するため、事故のグループ懇談会のやり方をまとめたマニュアルを作成しています。

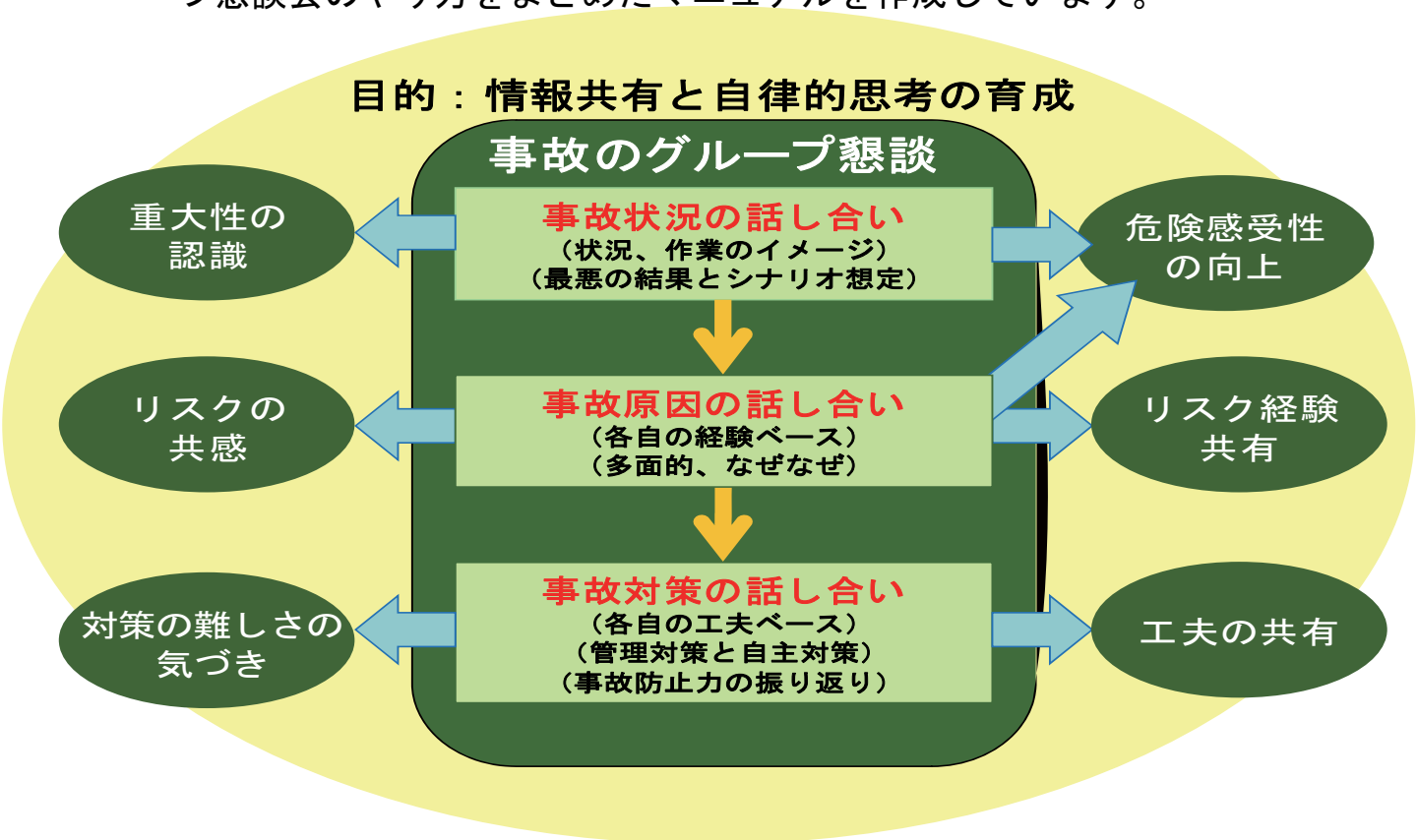

図1 事故のグループ懇談の構成と機能

【用途】

危険予知訓練などと同様に、現場の安全活動や訓練として活用できます。また、ヒヤリハット情報の共有等、現場の安全コミュニケーション不足の解決に用いることができます。

作業	エラー	シナリオ	最悪の結果	
行き過ぎた旨を車掌に連絡	知らせない	車掌が開扉 →乗客が転落……	乗客転落	ケガ
踏切の有無を確認	確認しない	踏切を行き過ぎて停車 →踏切監視手配をしない →……	公衆や車等と接触	死傷 脱線

事故に至る作業の流れ

各作業の想定エラー

想定エラーが引き起こすシナリオ

シナリオが引き起こす最悪の結果（事態と損害）

図2 最悪の事態の想定の工夫

管理対策

機器や環境の改良や手順や制度の改正など、改善要求的なものや理想的なもの

特 徴

重要だが他者依存的（安全意識向上には弱い）制限は自由な発想を妨害

自主対策

意識づけや学習、やり方の工夫など、自分たちが明日からでも取り組める対策

特 徴

安全意識向上には重要精神論に陥らないよう注意

２つの方向の対策を意識した話し合い

図3 対策の話し合いの工夫

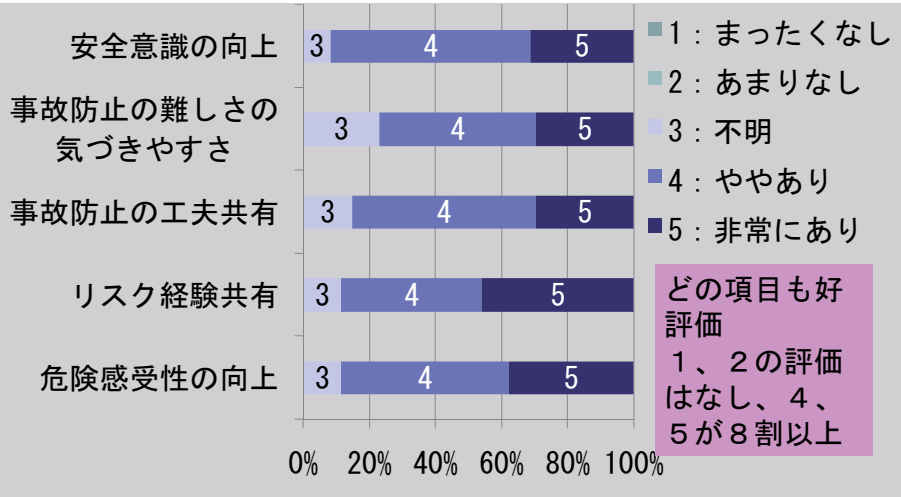

図4 事故のグループ懇談の有効性評価結果

図5 マニュアル